

第二十回學術大会発表要旨

オスカー・ベッカーにおける美的実存と

その時間性について

筑波大学大学院 佐々木香織

オスカー・ベッカーは、ハイデガーと同世代の現象学・実存主義の研究者として知られているが、彼の数少ない美学論は、シェリングの美的観念論に大きな影響を受けつつ、シェリングにおいても対抗軸として語られる「自然」と「自由」の両者に跨って存在する芸術家の実存に対して、独自の興味深い視点を提供している。この芸術家に特有な在り方について、特に「時間」という観点で考察するのが本研究の意図である。

世に傑作と称される作品は何であれ、修正に対する極度の感じやすさ、を持つている。モナ・リザにあと一筆加えるにせよ、差し引くにせよ、これ以上の修正は作品を決定的に破壊する。一筆の異動も許さない、傑作と凡作との境界を厳格に規定するこの基準は、人間の不断的努力によって越え得るものではなく、我々の理解を超えた創造的飛躍による以外には越えることができない。

また、傑作を完成させるということは、傑作をものする可能性や能力を持つているということも本質的に異なる。可能性や能力を持ち、それを遺憾なく發揮する機会を持ち、制作に対する並々ならぬ

意欲を持つていたとしても、必ずしも傑作を完成させようとは限らない。芸術家が制作中、制作しているという意識を持ちつつも、無意識的な力に突き動かされるように創造する、半ば狂気の状態に至ってはじめて、傑作は成就する。自然と自由、無意識的なものと意識的なものが一体となるその存在様態をベッカーは「Getragenheit (被担性)」と規定する。

この「Getragenheit」という美的実存に身を委ねるとき、芸術家は、過去・未来という存在していない時間形態を伴った通俗的時間にあるわけではない。時間的には「現在」を意味するが、ただそのみで完結し充足した「永遠の現在」にある。

だが芸術家は、制作活動において常に「永遠の現在」にあるのではない。制作の発端においては通俗的時間にこそ支えられている。通俗的時間において、未来は常に空虚な暗がりとして現在を脅かしており、芸術家は、自分が制作をすることであらかじめ知っているが、何をどう制作するのは全く与り知らない。その創造に対する不安の反面、この未来の未知性は、全く新たなものの創造という誘惑であり、創造の条件でもある。

つまり芸術家は、創造的行為の継起においては、通俗的時間に存する未来によって創造への勧誘を受け、創作活動を開始する。そして、無意識的な自然に身を委ね、「Getragenheit」の状態となり、未来に威嚇されない「永遠の現在」において創造するとき、傑作は成就する。このような芸術家の美的実存という視点は、シェリング哲学を存在論的に捉え直したものとして、美学のみならず存在論に対しても、新たな問題を提起するものであろう。

シーザー問題からの一視角

筑波大学大学院 井上 直昭

最近のフレーゲ研究の一つの流れは、C・ライトの *Frege's Conception of Numbers as Objects* [1983] によって方向付けられた。

この本は、概念Fに付値される同値類 $\#F$ とその同値関係に関するヒュームの原理(HP)と呼ばれるフレーゲ的文脈原理に注意を向けさせた。この原理が述べるとは… $\#F$ と $\#G$ が同一であるのは、 F と G が一対一対応するときそのときに限る、である。ライトはこのヒュームの原理に関するフレーゲの実質的な数学的帰結について少なくとも二つの貢献を果たしている。一つは、一般にフレーゲ算術と呼ばれる二階の論理+HPから二階のペアの算術を導出するというフレーゲの仕事を再構成したということ。二つめは、このフレーゲ算術が無矛盾であるということを見出したことである。

ライトは以上の諸結果をもとにフレーゲの論理主義を復興させた。この運動の原動力となっているのは、ヒュームの原理を教訓に關する文脈的定義として採用するということである。そしてこの立場では、ヒュームの原理は数の名前を説明する認識的原理として理解され、それによって、その名前が指示する対象がわれわれの存在論の中へ導入されると考えられている。

しかし、フレーゲが *Die Grundlagen der Arithmetik* の六十六節で提起したシーザー問題から見たとき、HPに対するライトの理解は正しくないように思われる。この問題は次のようである…ヒューム

の原理をその一つの事例としてもつようなフレーゲ的文脈原理は、一辺が変項として現れるような同一性命題 " $\forall x \#F$ " を説明しない。私はこのシーザー問題を論理的に存在の問題であると考える。

概念変数 " F " に適用される記号 " $\#$ " は、概念からある対象への関数である。そしてこの関数がパラメータ F と概念間に適用される同値関係によって固定されるならば、その関数のクラス $\#F$ が特定される。この関数のクラスが、フレーゲが §69 の六十九節で導入した外延という実在者である。シーザー問題は、概念とそれが写像される対象との間で定義されうる関数をも対象として扱おうとする戦略から発生してくるのであり、それを論理的に正当化しようとするのがフレーゲの論理主義である。それゆえ、シーザー問題はフレーゲの論理主義の根底に横たわる存在の問題なのであって、この問題がライトのように認識論的に解決されるとは思われない。

もしそうだとすると、フレーゲ算術がいかに強力な理論であり、さらにそれが無矛盾であるという保証が与えられていようと、それらはシーザー問題を解決しない。そしてシーザー問題が解決されないのであれば、フレーゲの論理主義は擁護され得ないように思われるのである。

予祝儀礼についての宗教学的省察

筑波大学大学院 平良 直

一般的理解では「予祝」は、文字通り「あらかじめ祝うこと」を意味し、その儀礼を意味する「予祝行事」は、「その年の豊作を祈って、小正月などに秋の豊作の様子を模擬実演する呪術行事」である。また、その分類は(1)稲作の栽培過程の模擬行為、(2)小正月の訪問者と害虫駆除などの模擬行為、(3)稲や畑作物の結実化した姿を象徴化したものを祀る、(4)年占的要素としての各種占いや競技の四つに類型化できるとされる。これらの儀礼は、いずれもこれから行われることを前もって現じることにより「予祝儀礼」としての共通性がある。この場合、「模擬」されることは本来あるべき事柄であり、直線的な時間的経緯から見れば、この「模擬」は、これから起こることを模倣し現在化させることを意味することになる。つまり模倣する対象はこれからなされるべき出来事であり、それゆえ「豊作の祈願」としてこれらの「予祝」が理解されるといえる。しかしながらこの「模擬」の対象はこのようにこれから起こることのみを対象にするのであろうか。

具体的な事象にみられる「予祝」の特質は、神的なるものの力に必ずかかると執り行われるものであるということである。たとえば「模擬」の儀礼として知られる御田植祭りなどは本来神事であり、聖なる齋場で行われるものである。また、しばしば神事芸能として理解される神楽殿等でのお田植えの所作は神の業の「模倣」を象徴するものである。このような儀礼の場で象徴的に神的なるもの

が現前する御田植の所作は象徴的次元においてはもはや「模倣」ではなく、あえて「模倣」の対象を見出すとすれば、これから行われる事柄を「模擬」するというより、むしろ神々の所作を「模倣」するものであるといわざるをえない。さらにいえば、これからおこなわれることはこの神的なるものの現前を模倣するものであるとも解釈でき、ここにおいて「模倣」するものとされるものの関係は逆転する。予祝儀礼において我々が見落としてはならないことは、「予祝儀礼」が祈りであることはいうまでもなく、予祝を根本において宗教現象として予祝たらしめるものとして、神々の行為を「模倣」する要素が含まれるということである。このような観点からすれば、「予祝」は、願望を投影するものとして理解されてきたが、願望の投影としての側面のみから理解すると宗教現象としての「予祝」の極めて重要な要素を見落としてしまうといえる。通俗的な意味での祈りとして「予祝」の特質を強調することは、「予祝儀礼」の有する特異な宗教的側面が通俗的意味での「願望の投影」としての祈り一般の出来事に還元されてしまうことになるのである。

発表においては、具体的事例として沖繩の祭祀歌謡を取り上げ、考察をおこなうなかで「予祝儀礼」に象徴的に暗示される始源的存

ニヒリズムと価値の形而上学

— ニーチェの形而上学とハイデッガーの思索 —

埼玉大学 岡田 道程

「ニヒリズム」という語はもともと「無」(Nichts) もしくは「非有」(Nichtsein) を意味するラテン語 *nihil* に由来している。「無」とはこの場合、或る事柄、或る有るものが直前にないこと、非有であることを意味する。それ故、「無」と *nihil* は有るものをその有において否定するのであり、一つの「有の概念」であって、いかなる「価値概念」でもない。つまり、*nihil* とニヒリズムとは本来「価値思想とはいかなる必然的な本質連関もない」のである。しかしながら、ニーチェは「ニヒリズム」の語と概念を徹頭徹尾、価値思想の方から把握している。歴史的に見るなら、「有るものとは何か」(ti roûv; Was ist das Seiende?) という問いは、プラトンとアリストテレス以来の最も古い、かつすべての形而上学の「主導的問い」である。これに対して、価値思想は十九世紀に至って、とりわけニーチェの哲学を通じて初めて支配権を獲得したのであり、これにより形而上学は「それ自らの本質の完成への決定的な方向転換」を成し遂げた。形而上学における「価値思想」の支配が何を意味するかは、ニーチェが将来の形而上学の課題を「すべての価値の価値転換」として把握しているのみならず、自らに先行するすべての従来の形而上学をも「権力への意志の形而上学」として設定している点に、端的に示されている。西洋形而上学の全歴史は、いまや価値思想の光の内でもろもろの価値定立の歴史として現われる。

「価値」転換 (Umwertung) とはそれ故、根本において「有るものすべての規定の、諸価値への思惟転換 (Umdenken)」として解釈され得る。

ところで、「ニヒリズム」という語は多義的であるが、両極においては (i) 従来の最高の諸価値の単なる価値喪失、しかしまた同時に、(ii) 「価値喪失への無制約的な反対運動」(die unbedingte Gegenbewegung zur Entwertung) という意味において、両義的である。ニーチェは自らの哲学を「プラトン主義に対する反対運動」として、つまり形而上学に対する反対運動として理解している。しかし、ハイデッガーの解釈はこの最も重要な点において異なっており、ニーチェの哲学は、「プラトン主義の転倒」による形而上学の克服というその中心的思想ゆえに、西洋の形而上学それ自身であると言われている。ニーチェの形而上学は、彼自身の思惟の内ではすべての価値の価値転換による「形而上学の克服」を意図しているが、しかしハイデッガーによれば、それは「西洋形而上学の完成」(Vollendung der abendländischen Metaphysik) にはかならない。だが、このような解釈は何に基づいて可能となるのであるうか。形而上学の「克服」かあるいは形而上学の「終末」もしくは「完成」かをめぐる、ニーチェとハイデッガーとの「対決」はどこにその手掛かりが見出されるのか。

本発表は、ニーチェの遺稿集『権力への意志』(グロスオクターフ版全集第一五巻、一六巻) を中心とする諸著作と、ハイデッガーの五学期に及ぶ「ニーチェ講義」(Nietzschevorlesungen) (一九三六／三七一四〇年、クロスターマン版全集第四三巻、四四巻、四七

卷、四八卷、五〇卷）およびそれらの講義をもとに一九四三年に執筆された論文『ニーチェの言葉「神は死せり」』（全集第五卷所収）とを参考にしながら、先の本質的な問いを解く鍵として、ニーチェが「価値」という語で何を理解し、ハイデッガーがそれについてどのように思索しているかを、考察する。

宗教多元主義の克服と新しい宗教哲学の可能性

和歌山信愛女子短期大学 保呂 篤彦

現在キリスト教神学はキリスト教とその他の諸宗教との関係を問う直さざるをえない状況に直面している。そして、この課題に応えるべく展開されてきた「諸宗教の神学」は、「排他主義」「包括主義」「多元主義」の三類型に分類されるのが一般的である。「排他主義」とは、救済をキリスト教のみに限定し、他宗教の信者は救われることがないとする立場である。また「包括主義」とは、キリスト教以外の宗教にも救済を認めるものの、その救済は何れもイエス・キリストに基づくとして、すべての救いをキリスト教に吸収してしまふ立場であつて、結局他宗教の独自性を正当に扱つてはおらず、偽装した「排他主義」ではない。これに対して、ジョン・ヒック等の「多元主義」は、あらゆる宗教伝統に独自の救済があることを認め、これら諸宗教伝統を、共通の唯一の神的存在に對する人間の側の応答の諸形態と見なし、それゆえにこそ多様なのだと考える。そして、この立場でこそ諸宗教伝統は互いに他を自らと同等であると承認することができ、伝道の偽装した戦略でしかない対話とは異なる真理探究的な真の対話もまた可能になると主張される。

しかしながら、このような「多元主義」にも多くの問題点が指摘されている。まず、この「多元主義」は、すべての宗教伝統を相對視し、それらが各々コミットしている神的存在者の背後に同一の究極的存在を同定しようような高みに自らが立ちうると想定しているが、そのようなことは不可能であろうという批判がある。また、そ

うであれば、この「多元主義」はそれ自体が他の何れの宗教伝統とも異なる新しい宗教を形成することになり、結局この新しい宗教の「排他主義」へと反転してしまう。さらに、この「多元主義」の立場からは、各宗教伝統におけるコミットメントの真剣さ、信仰の絶対性が正当に取り扱われないという批判も無視できない。

こう考えると「排他主義」か「多元主義」かという問題設定自体に難点があると言わざるをえない。この問題設定は実は絶対と相對との二重性の現実（西田哲学の「絶対矛盾的自己同一」）を見誤つたものであると言える。武藤一雄の研究は、「宗教哲学」の問題として、上の問題設定の不毛さを克服する試みと見なしうる。武藤は、「宗教哲学」の存立自体を否定する「神学主義」（「排他主義」に相当）と信仰を相對化してしまふ近代主義的宗教哲学の「宗教主義」（「多元主義」に相当）との二者択一を、キルケゴールの「宗教性A」「宗教性B」という概念や西田哲学に通ずる論理を用いて克服し、「神学的宗教哲学」という、これまでの「神学」と「宗教哲学」の何れの範疇にも収まらない「新しい宗教哲学の可能性」を開こうとしている。この立場は、信仰の絶対性を裏切ることなくキリスト教以外の諸宗教に開かれていることを目指しており、「諸宗教の神学」や「宗教間対話」をめぐる議論にも大いに貢献しようである。

デフレーション真理論と実在的真理

筑波大学 橋本 康二

デフレーション真理論とは、「P」ということが真であるのは、Pであるとき、かつ、そのときに限る」という同値図式の潜在無限個のすべての事例は（図式「PならばP」や「PまたはPではない」のすべての事例は論理的真理であると言うときと同じ意味で）論理的に真である、という主張を核にした真理論である。デフレーション論者によれば、「SがP₁ということを感じているならP₁であり、かつ、SがP₂ということを感じているならP₂であり、かつ、…」という無限連言が、「すべてのxについて、Sがxを感じているならば、xは真である」という有限の長さの文で表現可能になるのは、同値図式的事例のすべてが論理的真理であることによる。また、これらの事例によって非明示的に定義されている論理的性質が、述語「真である」の表示するものであり、それ以外のいかなる実在的性質（例えば、検証可能性や有用性など）も述語「真である」の表示対象ではない、とデフレーション論者は主張している。発表では、デフレーション真理論に抗して、実在的真理性質の存在を認める立場を擁護することは可能か、という問題を考察した。最初に、真理述語は実在的性質を表示するものとして導入されている、という立場を検討した。これは、我々はある経験を得て文「P」を主張し、それとは異なる経験を得て文「P」ということは真である」を主張するようになる、という立場である。そうすると、同値図式的事例が論理的真理ではなく経験的真理になり、更に、経

験的に偽となる事例も生じ得る、というのがデフレーション論者からの反論である。この事実は受け止めるべきであるが、それが反論になっていると認める必要はない。述語「真である」は二義的に使用されており、無限連言を有限文へと変換する道具として使用されることもあれば、実在的性質を表示するために使用される、と考える余地が存在するからである。次に、単に文「P」を主張する際にも既に実在的真理性質の経験が必要である、という立場を検討した。これは、我々は、まずPという命題を把握し、次に命題Pが真であるとはどういうことなのかを把握し、後者の把握に基づいて、しかるべき経験が与えられれば文「P」を主張するのである、という立場である。しかし、命題Pの把握はまさに文「P」を主張する傾向性を獲得することに存するのだから、命題の真理性の把握というステップは存在しない、というのがデフレーション論者の反論である。したがって、この立場を擁護するためには、命題Pの把握とは何に存するのかを、文「P」の主張の傾向性に還元せずに説明するという難問が突き付けられることになるであろう。